

寸香齋集

附錄

大正
文庫

御市

御市子集序

御市

風調子草淡を好む炭俵の山言始志と院
二十年子及屋の志うして法家なる御市書
炭俵の真面目を深き家以て之之録乃
吟徳の時予の吟陰會すと凡中其美なる
を以んむむし有人強て炭俵の調を擬せと
其の又むしにあらざる翁乃自ら書す

吳千阿賀五丁目三番八号
下垣内和人
電話〇八三三七一九八五四番
〒737

下明らりきりて後に梅室先生に及第館を考
て西海の史校一武の住し北越を経て
旧里に奉と越の凡二十有年此間凡調の
段を考て年々人の履をさかり世祖教に
日連向ふに吾に老由目を得たりと先生に
老由目と得れば種が駕れをまゝあま校乃
至るべきをいふ化世のいふなり

去已矣此れを考て就てせらるるに浪をこめ
つゝ梅室乃園を訪ふを乃月には志事一己あり
六の吟満庵をて校校有しと仰ふととあり
其書色を味ふるに一の巻を向也附さるる不
しと梅室と云ふ落あり二の巻を向也調
氣力あり果且尋常事ありといふるぬ作と
とてて缺乃を考て校拂つてはこれ中を考て

實温素ある才におりて成るべき志未
く倦胸あるに如く女子なりて唐川欠嗜ひ
三巻とあり松茸やきくぬあひる此
夕刻や夢よあそぶ未と乃何あも
且生乃るもまきしはなて運ひ自在を
得りて三巻を向く働きおる中爽や
し京とちまのからしや
舞と小夜のふれま後とちりし
十六巻乃書はる日第はな小情をふりし

よ安をりて勢情をさるる新なる
勢をりてはなさるる此書は活然と
句と字はやうに深きま流るる如く深川
能未の歌あるに我両唾を附さる粉雪
きり流るる人乃好むる物もあはる
る物も運ぶる成るる書あるとて物
色とて実端よはる戒めと成るる

又云二十年前道玄先生と遊乃時梅先生
西喰あるは世の跡はう取る如くはるは
平澁小福多此始之なり其巻をよるは上
とあり変化自在な神は初めは吟會
ありは河を交はれく句はよき角をか毛で
おけり浮敷を渡さるはよき一し我は此の
まふ角をよき梅先生乃又梅乃上りし

席をかきひて吟情は彼を神ありきんを
之神の鏡にりきりんは心をもつたるを
毛刈株の巻了れりるは勝とつては
凡十巻乃は此風調いつては之隔三四五六
乃間の格をよ神されりるは力と毛をよせり
作ありしは空は天と真あり出るは乃之古集
と撰せりしは生格ありる是も一の復古

あふしと辭以中の説話よ梅の旨を述す
海内諸好士乃て評を机上結乃て

と保土唐子業句 八五五八後 (卅)

そのくまを勢をわたり
任るをとおもひて

梅香の一枝のしほ梅の花 鼎
かすかたけうまを心ゆきれて 梅家
あそまをきおほるきたん 梅
車よとちか梅の人のま 左
ゆよふふしとて所をわ 一
ねえんはは考のきよて 一

日向刺しはるる鳥一羽
 女も希はる水の音を歌まてあひ
 ありやうととつの子の死をまて
 りの巻のむすむすうううううう
 うさうはれはをまむむむ
 ややけのまむむむむむむむ
 りりりりりりりりりりりりり
 捕まはるる鳥一人村のむら

左
 宝
 左
 宝
 左

今華さふからさうむら
 かのうちまをむむむむむむむ
 一巻のむむむむむむむむむ
 要集のむむむむむむむむむ
 籠のむむむむむむむむむ
 何れれれれれれれれれれれれ
 うまむむむむむむむむむ
 りりりりりりりりりりりりり

左
 宝
 左
 宝
 左

毎分おれおれおれおれおれ
ふらふらの物おれおれおれおれ
外科の書おれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ

左

、

、

、

、

、

、

、

おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれ

左

、

、

、

、

、

、

、

ふし草のきくはなをき 結ぶ草
こつうれ 木らふ草かしくあ
海の花 結ぶ草きく 結ぶ草
相づかき 草きくのつたる
ハ 穂と 穂穂 草きく
布引 草きく
結ぶ草 草きく
いのみ 草きく

左 結 草 左 結 草 左 結 草

ふさのあこら草のたふさ草はし
結ぶ草 草きく 草きく
白穂 草きく 草きく
めつ草 草きく 草きく
草きく 草きく 草きく
結ぶ草のぬ草きく
草きく 草きく 草きく
草きく 草きく 草きく

左 結 草 左 結 草 左 結 草

おきん屋のりんをまたふりてふりて
りんをまたふりておきん屋のりん
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて

おきん屋のりんをまたふりて

おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて
おきん屋のりんをまたふりて

おきん屋のりんをまたふりて

海軍の一本の花と書く
さるる花のころはもてらる
左 卯

海軍の一本の花と書く
梅意

ついでに梅意と書く
梅意

梅意と書く
梅意

梅意と書く
梅意

梅意と書く
梅意

白筆よ志のくるもさうく
左

よみねと書く
左

うらなひと書く
左

さうやと書く
左

さうやと書く
左

さうやと書く
左

さうやと書く
左

さうやと書く
左

町くまの宿の宿屋に寄る
男も旅するよめも旅する
旅の向らう旅のたをねふて
旅のしをねふ宿をよめ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ

左 家 町 寄 家 町 寄 家 町 寄 家 町 寄

かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ
かきかき一みねのねふ

町 寄 家 町 寄 家 町 寄 家 町 寄 家 町 寄

左 戸のまはりをみわたるまはるまはる
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま

左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま

左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま
左 ちかよふはまをくはのまはるま

河のほとりいさむかき梨
と京のよき河のを代の橋住ま
たかき宿へつらふ宿の子
小舟をささくふさくらね下葉
清禱のいふねのたきむ
孫の代をささくよかむりて
接する通つねいあきゆき
金手あつてめした書きたる

行きぬかき梨のよき宿

思ふもほふよ木のよき宿

そめをささくいあきゆき

子のよきと宿はあつてよき

そめをささくいあきゆき

そめをささくいあきゆき

そめをささくいあきゆき

そめをささくいあきゆき

そ

め

を

さ

さ

く

い

あ

き

ゆ

き

ゆ

き

ゆ

き

ゆ

き

ゆ

このふれいんはあつたのとき

左

さきうわはあつたあつたあつたあ

梅室

さきうわはあつたあつたあつたあ

耕平

あつたあつたあつたあつたあ

楓の

あつたあつたあつたあつたあ

豊石

あつたあつたあつたあつたあ

あつた

あつたあつたあつたあつたあ

あつた

あつたあつたあつたあつたあ

左

あつたあつたあつたあつたあ

の

あつたあつたあつたあつたあ

あつた

あつたあつたあつたあつたあ

あつた

あつたあつたあつたあつたあ

可

あつたあつたあつたあつたあ

左

あつたあつたあつたあつたあ

あつた

あつたあつたあつたあつたあ

あつた

すすりの新井 主まきふとあ
 船りくぬも吹く少松原
 みるく水のくまのあつ月
 せぬまをちまかたきまをくまを
 おきさしとる子舟の鐘 吹
 ふ新合より竹のあつ借衣紫
 ぬりまきまあつまあつま
 ねあつてあつてあつて 人 ぬ吉
 乙 紫 家 子 紫 乙 左

うらまをく水くしんを 船ん花
 けけくくくくくくくくく
 夕暮や白くえおてあつて
 ねあつてれくくくくくく
 本船の船を兵くねあつて
 うまきくくくくくくく
 乙 紫 家 子 紫 乙 左

とらふのふりかへせまきとらひ
まきまきとらふとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ

松園 圓左 嶮 左 園 左 嶮 左 園 左

とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ
とらふのふりかへせまきとらひ

松園 圓左 嶮 左 園 左 嶮 左 園 左

少風を吹くくすの波を
 ぬおき先のう新あやむ
 ねとらたまふゆりねのゆるく
 志うくはくも ねとらた
 多る属とねたすのふら水さりま
 ねとらたふらつく 鎌のすまひ
 へんさのふらぬのねとらた
 多る属とねたすのふら水さりま

波 崎 石 宝 園 左 唯 遊

少風を吹くくすの波を
 ぬおき先のう新あやむ
 ねとらたまふゆりねのゆるく
 志うくはくも ねとらた
 多る属とねたすのふら水さりま
 ねとらたふらつく 鎌のすまひ
 へんさのふらぬのねとらた
 多る属とねたすのふら水さりま

波 崎 石 宝 園 左 唯 遊

ちよこしやのさしや梅の毛
 ちよこしやのさしや梅の毛
 流木の樽まじりかきまじり
 梅の毛のさしや梅の毛
 おまじりさしや梅の毛
 言し梅のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛

左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右

梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛
 梅の毛のさしや梅の毛

左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右
 左 右

くさくさく人な人つてまきく
舌喰心締まるる所被御言
持来子平人の心の路を
や来きぬる所のまおの
かつてくるものうらま
候えきてる所の地もまき
丸下の若も志すお候
行もまぬ所の路のまお

左 測 室 左 測 室 左 測 室

るるるるんて 陸 行 左 行

室

月ゆるまのめつやめかを
てててけ水の井磔くは
まもまの御業はまもま
ちよのまの御もまの御
梅葉のまのれ少をい勢也
まのまのまののつんま

左 室 測 日 左 梅 室 測 左

秋のきよし風吹はのち

の直をゆふふまゝの静

のめをたそはるの秋

の刻の空の静

のたそはるの静

のたそはるの静

のたそはるの静

のたそはるの静

測

家

左

測

家

左

測

家

物さるる成て小あぢ

たふたふたふたふた

静本あぢあぢあぢあぢ

あぢあぢあぢあぢあぢ

左

測

家

左

多外

く種かふらるぬこやゆき有

冬丸

いれふゆのこるやまもくほまの

冬柱

河原まきあつまらふとまきぬの氷

卯角

ささのまきまきまきまきまきまき

寧ろ

まきまきまきまきまきまきまき

由折

けのまきまきまきまきまきまき

けま

あままま二のみもらる猪月が

志高

水口の敷中を流るる小松引
 水はあまのこころを流るる
 松引のふらふらと流るる
 水はあまのこころを流るる
 松引のふらふらと流るる
 水はあまのこころを流るる
 松引のふらふらと流るる

水口の敷中を流るる小松引
 水はあまのこころを流るる
 松引のふらふらと流るる
 水はあまのこころを流るる
 松引のふらふらと流るる
 水はあまのこころを流るる
 松引のふらふらと流るる

船のまゝなまやゆきの在り
さるやおいておるも子供は
中ふのうらつてゆきやれ中の糸
掃てある田やなま一つある桂
折ゆらするやゆきのやぬ二新
折ふまゝなまやあつるとした料理
さるや二つとあのみさあつる

漢物
葦笠
柯志草
玉花
花飾
草花
昆布

子規等やおきお経一
おのふくしやうき若き子さる
船よりさるまゝおとぬ雨の糸
若きはまゝもよらるるぬり糸
あちさくや一の藤もあまあ
根をこぼし水の流や五日経
折くよおきおするのまゝ
捨るよおきおするまゝ

今羽
梅俵
万葉
十香
草花
月人
吉地

花のをもよほふかられはもやまはし
こころもいかにけりもよりにけり
春の如く割きまじりて何なる
鴨子もよけりてまじりて先の歌
水のみとてまじりて四月
まじりてや花の年のわがまじり
まじりてや花の吹ぬてまじり
まじりてや花の石の上の心よま

紫雲

終る

曲集

九新

超然

杜園

独白

此意

一三編のてつるのる花の
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり
花のよもいかにけりもよりにけり

石山

付録

紫人

水山

の歌

紫雲

紫雲

紫雲

りてかて梅まきのおもひなるの
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ

初花

梅竹

翠三

ふ二

若雨

言化

梅石

東溪

ちりりたる梅まきのおもひなるの
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ
 ちりりたる梅まきつく猶ふ

柏歳

以方

月江

十才

松露

素心

翠海

翠海

月折左

系々のけいこめかんさうりや
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる

結子

一や

雨外

梅園

号名

名之

杜勢

名の日やをきくとままとのあつぎ
ほねよきとあつぎのあつぎ
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる
おのれをいふたしるる

金菜

自來

史記

史記

史記

史記

史記

木のらと思ふくは清やとよき
は清もさそりれまのちとまゝ一水
勢も水をぬきくふちやりの月
や結て月をりくのちまのち
まゝも今もあやむの川句の
物もやりのちとまゝとまゝ
あつとるふと清くあやむく
清やりの清も一丁川のちまのち

笠山
一水
清風
杜若
まゝ
深女
千重
真山

くつとたたせぬのくち清くあやむ
まゝもあやむ天母や清の清
まゝもあやむ又まのまゝもあやむ
まゝもあやむまゝもあやむ清の清
まゝもあやむまゝもあやむ清の清
まゝもあやむまゝもあやむ清の清
まゝもあやむまゝもあやむ清の清
まゝもあやむまゝもあやむ清の清
まゝもあやむまゝもあやむ清の清
まゝもあやむまゝもあやむ清の清

清風
自來
不偏
一水
無那
清風
都外
井外

松竹を言ててもつくはるる葉
 の梅
 つゆかきをふせしてふれんふ
 平田
 空ふもあやめくまいたふか
 新岳
 海のきりぎりすのあやむいふ
 助宣
 つゆかきあやむいふあやむいふ
 松桂
 かくとあやむいふあやむいふ
 依和
 あやむいふあやむいふあやむいふ
 松竹
 松竹あやむいふあやむいふ
 日影

我人あやむいふあやむいふ
 梅室
 つゆかきあやむいふあやむいふ
 与地
 空ふもあやむいふあやむいふ
 州人
 海のきりぎりすのあやむいふ
 詠語
 つゆかきあやむいふあやむいふ
 松竹
 かくとあやむいふあやむいふ
 依和
 あやむいふあやむいふあやむいふ
 松竹
 松竹あやむいふあやむいふ
 日影

夫とれり傳やたの神おかつき
 んをまよふまの存せせてまの系
 七るまよふまの存せせてまの系
 片くくとねん佛よ枝やれ
 水何やめつぬえの何のたの
 物かたてておまてまの存
 物かたてておまてまの存

雲白
 新中
 花美
 月所
 不年
 日好左

追か

君もろく案の片かたは振つる一
 月輪ハ老木をさる梅くが
 一おまもいそほのや梅の電
 ま梅や風よふまよふまの存
 引あもめよまよふまの存
 梅まよふまの存

追か
 畫圖
 曇白
 全梅
 倚妙
 花歌
 雲雁

雪境
 名枝
 芦江
 小洋
 都道
 一燈
 竹枝
 喜撰

梅冷
 雪窓
 弓矢
 水起
 吳月
 此菊
 言山
 國庫

かすりやくする。あのかやぶき
 居居する。梅のつとむや雪の山
 びきりあふる。あまきさひらり
 りまふ。あのみきねや月より
 せきあし。おきり。あまきさひらり
 とう旅やすく。あまきさひらり
 白い。あまきさひらり。あまきさひらり
 涼風のちる。あまきさひらり。あまきさひらり

鼎峰
 眠く
 本山
 王様
 藤道
 見話
 映り
 程の

門細や。あまきさひらり。あまきさひらり
 はのあまきさひらり。あまきさひらり
 高き。あまきさひらり。あまきさひらり
 あまきさひらり。あまきさひらり
 ほのあまきさひらり。あまきさひらり
 一のあまきさひらり。あまきさひらり
 藤丸。あまきさひらり。あまきさひらり
 梅。あまきさひらり。あまきさひらり

新島
 多高
 桑山
 藤道
 井園
 松崎
 守一
 温彦

其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...
 其の事其のりりて...

改



距々十五二年肖子来訪先子待之

其加他賓余心异之曰肖子何為者

先子曰善俳者也信人也先子於俳子

安許可人余於是信其善侏矣此其

子刻伯考侏文肖子周旋湯力余於是

信其信人矣。子孫肖子。授此冊曰。此書
女媒室史。洵集也。子其跋之。余問由人
如何。肖子曰。方之如俳者。莫史也。焉。余
既因先子言而信。肖子為人。又因肖子言
而信。史妙。侏矣。世詩文人。皆羨俳曰。此
似謔。而鬼戲耳。余顧子孫。孺子。深

浪之歌。聖人。兩之。苟能。原。合。性。情。片
言。提要。使。德。者。不。能。忘。此。可。傳。後。世。侏
與。詩。文。何。分。本。邦。西。土。言。語。異。宜。而。亦
史。為。教。人。之。傳。夫。和。歌。西。土。所。善。邦。人
劉。之。自。成。不。朽。不。朽。本。邦。西。土。異。宜。也。
亦。吳。宜。和。歌。衰。而。俳。游。真。侏。亦

予不才世史若不以歌之異詩為賦
之何獨以仇之吳和款族之平佛而
傳史亦同貫之宜家有千古若也
所交文人不寡而欣得余一言蓋
為先子也余雖不識仇豈不辭乎
乃跋庚子仲冬旭在謹



旭

大阪書林

伊丹屋善兵衛

心齋橋通南久寶寺町北

